

## 勝山雅世さんに聞く「呼吸するオルガン」の聴きどころ

聞き手：飯田有抄

### ■ホール全体が人体に？！

「呼吸するオルガン」と題した今回のコンサートは、サントリーホールをひとりの人間に見立てています。ホールのオルガンには、風を送る吹子が二つ付いています。それが人間の肺にあたります。そしてさまざまな音色を響かせるパイプは、人間の毛細血管です。客席のお客さまひとりひとは細胞です。肺で取り込んだ酸素が、血管を通じて全身の細胞へと行き渡るように、オルガンの吹子で作った空気が、パイプを通じて音楽となり、客席の皆さんが生き生きとなるような、そんな演奏を目指したいと思っています。

### ■“毛細血管”を駆け巡るカラフルな響き

サントリーホールのオルガンには、全部で74個のストップ(音色を変えるレバー)があります。手の鍵盤(4段)と足鍵盤のすべての音で、74種類の音色を出すために、5,898本ものパイプがあります。ひとつのコンサートの中で、全部のパイプを鳴らすことは不可能ですが、今回はできるだけ多くの毛細血管に空気を送り込みたいと考えて、次の4作品を選びました。

#### ○J. S. バッハ：前奏曲とフーガ ホ短調 BWV 548

まずはバロック時代のヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)の作品です。バッハが演奏していたオルガンは、8フィート(1フィートは約30cm)という基本になる長さのパイプの音色が充実していました。そのため北ドイツに代表されるアルプ・シュニットガー(1648～1719)製作のオルガンのような鋭い響きとは少し異なり、比較的ふっくらとした、柔らかな響きを持っています。この曲では、ポリフォニー(多声)の線的な横の流れと、同時に響く縦のハーモニーが、場面ごとに様々に変化し、豊かにオルガンを鳴らします。

#### ○西村 朗：オルガンのための前奏曲『焔の幻影』

今度は現代の日本の作品です。オルガンのおもしろさを存分に発揮できる曲です。冒頭でいきなり一番高い音のパイプ(1フィート)と一番低い音のパイプ(32フィート)の使用が指示されています。両極端の音域の音から始まる曲は、あまり例を見ません。

最初はチリチリと焔が燃え始め、そこからどんどん勢いは増していきます。どこか原始的で異国情緒あふれる不思議な踊りの場面もあり、最後には真っ赤な焔がさらに勢いを増して燃え上がる情景が浮かびます。

#### ○近藤 岳：『花の歌(猷華傷)』

続いては、今回の「オルガンZANMAI!」にも登場される近藤岳さんの作品です。2011年に築地本願寺から委嘱を受けて作曲されたもので、仏教讃歌のメロディーに近藤さんならではのフランス的な色使いのハーモニーが掛け合わされた、とても美しい作品です。

近藤さんはオルガンのことを知り尽くした、音の魔術師です。楽譜にはストップの指示が書き込まれており、書いてある記譜音と実際に鳴る音とが異なるように記されています。それは、倍音の溶け合う、豊かな和声と音色が生まれるための仕掛けなのです。使用する鍵盤と音色の組み合わせによっても、その魅力はどこまでも広がっていきます。

#### ○リスト：コラール「わたしたちへ、救いを願う人々へ」による幻想曲とフーガ S. 259

締めくくりはフランツ・リスト(1811～86)による30分の大曲です。もともになるコラール(ジャコモ・マイアベーア作の大ヒットオペラの主題)が、時には声部を変え、テンポを変え、また拍子を変えて登場し、まるで交響詩のようなスケールの大ききで展開していきます。最後まで1つのコラールを変容させる書法は、この曲に大変説得力を持たせています。おしまいには、ハ長調のドミソドという和音が、サントリーホールが一番大きいパイプによって大音響で鳴らされます。ホール全体に充満するこの最後の和音を、全身で受け止めていただきたいと思います。

### ■深い呼吸と丁寧な暮らしが、よい演奏につながる

以前から呼吸を学ぶことに大変興味がありましたが、最近太極拳を始めました！深い呼吸を意識し、日頃の生活においても、すべてのことに丁寧に向かい合うことを心がけています。この1時間を通じて、皆様にも充実した呼吸を感じていただけると嬉しいです。

## 山口綾規さんに聞く「オルガンで巡るアメリカ」の聴きどころ

聞き手：飯田有抄

### ■アメリカのユニークなオルガン文化

アメリカにはユニークなオルガン文化が花開いていたのをご存知でしょうか。そのひとつが「シアター・オルガン」です。今から100年ほど前、まだ映画に音が付いていなかった時代、映画館ではオルガンが音楽を奏でていました。オルガンは劇伴音楽にとどまらず、映画の演出にも使用され、人々の感動に寄り添う楽器でした。当時の映画館は天井画が描かれていたり、シャンデリアがついていたり豪華絢爛。そこに置かれていたオルガンにもきらびやかな装飾が施されていました。

シアター・オルガンに心ひかれた私は、学生時代から何度もアメリカに通って名手たちの演奏に触れました。専門的にオルガンを勉強しようと心に決めたのも、シアター・オルガンとの出会いがあったからでした。

### ■何でもアリ?! 多様性に満ちたアメリカ音楽

アメリカの音楽は？とイメージされるものは、映画音楽をはじめ、ミュージカルやサロン音楽、ムード・ミュージックのようなものまで多岐にわたります。今回はその盛りだくさんの「アメリカ」を一つのオルガンでお楽しみいただきたいと思います。何でもアリのプログラムです。

#### ○ウェイン：『ヴァネッサ』

バーニー・ウェイン(1919～93)は、アメリカ商業音楽、ムード音楽の有名な作曲家です。多くのシアター・オルガン奏者がこの曲をレパートリーとしています。途中で拍子が変わり、豊かなストーリー性を感じさせてくれる作品です。日本ではほとんど知られていないと思いますので、まずはご挨拶代わりに。

#### ○ガーランド：『イン・ザ・ムード』

ジョー・ガーランド(1903～77)作曲、グレンミラー楽団の代表曲でもあります。いわゆるビッグ・バンドの音楽ですね。オルガンで演奏する場合は、ドラムが生み出す独特のグルーブ感を、アレンジの工夫で表現したいと思います。

#### ○カーン：ミュージカル『ロバータ』より「煙が目にしみる」

ここで雰囲気を変えて、柔らかい音色をお届けします。作曲はジェローム・カーン(1885～1945)、1950年代にザ・プラスターズの歌で大ヒットしました。歌うような表現は、オルガンの特

性上難しいことがあります。オルガンは音色や強弱の瞬時の変化が得意でないため、無表情に聞こえがちですが、和音の音数などで工夫をしてみました。

#### ○J. ウィリアムズ：映画『スター・ウォーズ』より メインタイトル

今回の「オルガン研究所」に出演される石丸由佳さんがCDを制作される際にアレンジしました。「ジョン・ウィリアムズ(1932～)による大編成のオーケストラの原曲になるべく忠実に」というご希望があったので、かなりの難曲になってしまいました。どんな曲でも軽々と弾きこなす石丸さんが「指から血が出る!」とおっしゃったほど。CDで大変素晴らしく演奏していただいたこの曲を、今日は自身で演奏します!

#### ○パーシケッティ：『教会暦のための聖歌と答唱歌集』第1巻 作品68 より

第4曲「造り主なる聖霊、その助けによって」

『ドライデン・リタージュカル組曲』作品144 より

第1曲「前奏曲」、第3曲「詩編」

ヴィンセント・パーシケッティ(1915～87)はアメリカの20世紀の作曲家で、吹奏楽の作品なども数多く手掛けています。オルガンといえば、やはり祈りの音楽。最初の曲は、イギリスの詩人ドライデンが書いた詩に、パーシケッティが音楽を付けた賛美歌です。続く曲では、このメロディーの変奏が続きます。徐々に原型を留めなくなっていくのですが、素敵な響きがたくさん登場しますので、どうぞお楽しみください。

ひたすら優しい「前奏曲」、そして「詩編」ではメリハリの効いた現代的な響きがします。「リタージュカル」とは「典礼」と訳されることがありますが、プロテスタントの教会では「リタージュカル」という言葉のまま使われているそうです。

#### ○ガーシュウィン：『ラブソディー・イン・ブルー』

締めはジョージ・ガーシュウィン(1898～1937)の名曲です。原曲はピアノ独奏とオーケストラによる作品で、以前ピアニストと一緒にオーケストラ・パートを演奏したことはありましたが、オルガン・ソロは初めてです。繊細な音から大合奏の迫力まで、オルガンならではの思い切ったアレンジでこの作品の楽しさを表現したいと思います。

昨今では、オルガンのレパートリーが多様になり豊かな広がりが出てきました。新しい側面も感じていただき、みなさんにますます「愛される楽器」であってほしいと願っています。

## 近藤 岳さんに聞く「讃えるオルガン」の聴きどころ

聞き手：飯田有抄

### ■フランスのオルガン音楽の系譜と伝統

パリ7区に1857年に建立したサント・クロティルドという教会があります。留学中だった僕は、威厳に満ちたファサードと天にそびえる2つの尖塔を持つこの教会へ、時折散歩しに行き、教会の中で過ごしたり、オルガンを聴きに出かけたりしました。セザール・フランクにゆかりのある教会なのですが、その名だたる歴代オルガニストたちに思いを馳せていたところ、あることに気がつきました。

初代のオルガニストだったフランクは、来年生誕200年を迎えます。第3代のトゥルヌミールは昨年が生誕150年でした。そして第5代のラングレは、今年没後30年というメモリアル・イヤーです。…何という偶然！奇しくも彼らが相次いで記念の年を迎えていたことに気が付き、そのことから浮かび上がってくる、彼らの音楽的な系譜や20世紀に息づくグレゴリオ聖歌をコンサートのテーマにしようと思ひ至りました。

### ■聖歌の旋律と、新しいハーモニーとの出会い

#### ○グリニ：『オルガン曲集第1巻』より 賛歌「めでたし、海の星よ」

フランクの時代からさかのぼり、最初にお届けするのは17世紀のフランスの古典期、オルガン黄金期の音楽です。ニコラ・ド・グリニ(1672～1703)は孤高の天才ともいえる作曲家で、この作品はグレゴリオ聖歌に基づく4曲からなる組曲(プラン・ジュ、フーガ、デュオ、グラン・ジュによるディアローグ)です。「プラン・ジュ」「グラン・ジュ」というのは音の組み合わせの名称です。フランスでは、オルガンの音色の組み合わせが、曲名や形式と結びつけられてきた歴史があるのです。

#### ○フランク：『3つのコラール』より 第3番 イ短調

フランス革命期に、教会やオルガンは甚大なダメージを受けてしまい、オルガン音楽も一時衰退してしまいました。しかし19世紀になると、セザール・フランク(1822～90)のような卓越した作曲家・オルガニストが現れ、交響的な響きのオルガンを数多く作った名匠A. カヴァイエ=コル(1811～99)とのコラボレーションによって、新たな黄金期を迎えます。今回はフランクの自作のメロディー(コラール)に基づく、彼の残した最後の作品から第3番をお聴きいただきます。

#### ○トゥルヌミール：『5つの即興曲』より 第1曲「小さなラプソディー」

この作品は、シャルル・トゥルヌミール(1870～1939)が1930～31年にサント・クロティルド教会で行った即興演奏の録音から、弟子のデュリュフレが採譜・復元したものです。第1曲目にあたる「小さなラプソディー」は、スケルツォを思わせる軽快な曲ですが、トゥルヌミールは各鍵盤をま

たいで、音色の綾を生み出すような効果もねらっており、オルガンを熟知した感性が随所に光っています。旋法的なニュアンスが大変印象的な小品です。

#### ○トゥルヌミール：『神秘的オルガン』より「聖霊降臨節」作品57

##### 第35番「聖母被昇天」より 第5曲「パラフレーズ・カリヨン」

トゥルヌミールはフランクの影響を色濃く受け、初期のオルガン作品にはロマン派的な影響が見られますが、ある時期からは極めて前衛的な響きを多用していきます。「パラフレーズ・カリヨン」は、彼の傑作『神秘的オルガン L'orgue mystique』の中の一曲です。この曲集は51の聖務日課からなる長大な連作で、バッハの全オルガン作品の長さに匹敵するとも言われています。「聖母被昇天」にちなんだ4つの聖歌と共に、2音の下行する「鐘」のモチーフがそこかしこに現れ、カリヨンの鳴り響きを思わせます。

#### ○近藤 岳：「サルヴェ・レジーナ」によるパラフレーズ

2013年に行われたポジティブオルガンでのコンサートのために作曲したもので、トゥルヌミールへのオマージュでもあるため、今回は彼の作品と並べて演奏したいと考えました。聖歌「サルヴェ・レジーナ」の美しい旋律に基づき、遠くから聴こえる「晩鐘」のモチーフから始まり、冒頭から最後まで途切れることのない低音ミのポワン・ドルグ(保続音)、古い旋法と近代的なハーモニーが織りなす、静かな祈りの歌です。

#### ○ラングレ：『中世組曲』より 第4曲「メディタシオン(聖体拝領)」

ジャン・ラングレ(1907～91)もトゥルヌミールからの音楽的伝統を継承し、ミサの式次第にのつとつた組曲を書いています。彼の音楽には、聖歌と調性的響き、非調性的響きが巧みにブレンドされているのが感じられます。この組曲の第4曲目は、穏やかな中に2つの聖歌が語りかけるように登場し、大変美しい表情を宿しています。

#### ○ラングレ：『グレゴリオ聖歌による3つのパラフレーズ』作品5 より

##### 第3曲 神への感謝の賛歌「テ・デウム」

最後に演奏するのはラングレの比較的初期の作品で、とりわけ第3曲の「テ・デウム」は演奏会で弾かれることが多い曲です。溢れんばかりの喜びが表現されており、時に熱狂的で圧倒的でさえもあります。その熱気にたたえられたまま圧巻のクライマックスへ導かれ、曲は堂々と締めくくられます。

何かを讃えて響くオルガンの音色。宗教的な意味だけでなく、だれかを讃えたり、現代から過去の所産を讃えたり、私たちの日々を讃えたり、何かそうした豊かな時間をこのコンサートを通じて感じていただけたら嬉しいです。